
ブラザーシップ

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイザーシップ

【Zマーク】

Z6395Z

【作者名】

南 昴

【あらすじ】

中学一年生の思春期の少女のうちに新しいママとラタ系アキバ男が同居する?今更そんなこと言われてもあたし困るんですけど。

親同士の再婚で多感な中学生と同居することになった透は、家族の為に強行手段を取るが・・・。

先に書いた「インパラの涙」の番外です。

第1話（前書き）

前に書いた インバラの涙の番外です。
いつから読んでも大丈夫ですが、どっちも読んでね～。（^-^）

第1話

「恵理花、こちらがお前のお母さんになる香坂あゆみさん、と息子さんの透君だ。

透君は成績優秀でこっちの私立高校にすることになつてゐる。お前も見習つて勉強教えてもらへなさい。」

ホテルの屋上のレストランで、あたしは「新しい家族」と対面した。

「よろしくね、恵理花ちゃん、娘がずっと欲しかつたから嬉しいわ。

「40代くらいの小柄な女性がにっこり笑つた。
む、確かに半端なく美人だ。

さすが、コブツキなのに、うちのパパが釣られただけはある。
でも、こんなでかい子供がいるとは正直思つてなかつたぞ。

「よろしく、恵理花ちゃん。透です。」

今時ありえない銀縁ビン底メガネに真っ白な顔。
ヘアスタイルもあるがままで感じ?
もうほほアキバ系じやん。
しかも頭いいときた。
なんかムカつくんですけど。

「はあ、よろしくです。」

あたしは上目遣いにちらつと一人を見比べ、目の前のジュースをストローで吸つた。

パパはこのおばさんと入籍して、うちこの一人を連れてくるらしい。

中学一年生の女の子と、このアキバ系高校生が一つ屋根の下で暮らして心配しないのか？

パパがどうでも良さそうなあたしの態度を見てヒヤヒヤしている。何とか場を盛り上げようと話を引つ張りつつしてるとんだけど、それがバレバレでサムイ。

「入籍は来月だが、引越しは来週にはすることになっている。二人とも再婚同士だし、挙式はせず旅行にでも行って済ませうと思つてゐるんだ。恵理花も仲良くやつてくれよ。」

・・・・どうでもいい情報。

もうなんか疲れてきた。

あたしは椅子から立ち上がつた。

「もひいいでしょ？来週引っ越してくるなら後はその時で。あたしはここで失礼します。」

きれいなおばさんばびくじして立ち上がりつとしたが、あたしは気にせず出口に直行した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

予告どおり一人は次の週あたしのうちに引っ越してきた。

母子家庭で貰いだったのか、荷物なんてたいしてなかつた。

あたしのうちには自慢じゃないけど、まあでかいし個室も余つてたら一人増えても平気なんだけど。

でも、アキバ男がアブナイ奴だったらどうすんだろ？

ソファに寝転んでゲームをしながら、あたしは一人が荷物を搬入するのを横目で観察する。

「恵理花ちゃん、今日からようじくね。」

きれいなおばさんがあたしに気をつかつて挨拶にきた。
気にしなくてもいいのこドジウザ。

「はあ、みひじくです。」

ソファに足を投げ出したまま、あたしは立ち上がりもせず返事した。おばさんは少し困った顔をしてダンボールを運んでいるアキバ男のところに帰った。

ちよつとかわいそつかな。

てか、あたしが気遣つてるし。

なんかめんどくなつて、あたしは自分の部屋に引っ込んだ。

自分で思うのだけれど、あたしを含めて世の中には産まれた場所を間違つた人がいる。

あたしの家はパパが会社の重役だから、生まれたときから物に

は困ったことがない。

欲しいものは何でも買つてもらえたし、習い事もなんでもやつた。

でも、それって猫に小判だ。

あたしは頭が悪くて、何を習つても続かなかつた。

大好きだったママは3年前、家を出でつた。

パパが仕事ばかりで寂しかつたつて、ドラマでよくある台詞を泣きながら訴えてた。

つまり、昔つきあつてた人と浮氣してしまつたのはパパのせいだと言いたかったみたい。

ママは最初あたしを連れて行きたがつたけど、あたしが断つた。何でかつて、相手の人が好きになれなかつたから。

連れ子に性的虐待なんてよくあるしね。

ママは最初の一年は連絡くれたけど、それからぱつたり止んだ。

「恵理花の妹ができたのよ。」

電話越しに聞いたママの最後の言葉がこれだ。
幸せそうに言われたつて、リアクションに困るつて。

「はあ、おめでとう。」

そういうてあたしは電話を切つた。

何が言いたいかつていうと、あたしみたいにバカで何にもできない、
でもママの愛だけは必要だつた子が重役でお金持ちのパパのつむぎ
生まれたのは 猫的には小判だ。

おまけに近所でも有名なお金持ちのうちだから、ママが男と出でつ
た噂は学校にも広まつて、あたしはすっかりイジメの対象だ。

もとからやつがまわってたんだけどね。

だから、バカな子にお金なんていらなかつたんだつて。

反対に賢く生まれて、お金さえかけば色んな才能があるだろう子がテレビでよくある大家族のうちに生まれちゃって、中卒で新聞配達やつてる現実。

世の中って不公平だ。

あたしはベッドに転がつてさつきのゲームの続きを始めた。

ドアをノックする音で田が覚めた。ゲームしながら寝てしまつたらしい。

「恵理花ちゃん、ご飯だよ。」

聞きなれない男の声？

あ
アキハ男
た
でも、意外に低くていい声してんじやん。
顔が見えなければ。

あたしはしづしふドアを開けた。

想定どおり、銀縁メガネのアキバ男が立っていた。

「今日は初日だから皆で一緒に食べようって、お父さんが言つてる。寝てた?」

は？お父さんで・・・。

もつ頼んでんのか、こいつは。

「分かったよ。今行きますよ。」

なんか不愉快だ。

あたしは露骨に嫌な顔をして、アキバ男を残して階下に降りた。

「では新しい家族を祝つて乾杯。」

パパがビールのグラスを上げる。

もうそういうの恥ずかしいしやめて欲しい。

ダイニングテーブルにはきれいなおばさんの手料理が所狭しと並んでいる。

張り切つて作つたに違ひない。

「恵理花ちゃん、どんどん食べてね。おかわりあるから。」

おばさんが取り皿にサラダを分けてあたしの前に置いた。
むむ、ムカつくけど料理は上手い。

「透君はいけるクチか？今日はオレが許す。どんどんやるわ。」

すでに出来上がりっちゃってるパパはアキバ男のグラスにビールを注ぐ。

「あ、頂きます。」

グラスに手を添えてビールを受けるアキバ男。
おいおい、高校生だろ。

「まあ、あなた。透はまだ未成年ですよ。透もなあに?いつも飲んでるみたいじゃない。」

おばさんが慌てて突っ込みを入れる。

「いいじゃないか。オレが高校の時は酒もタバコも二十歳で卒業してたさ。」

どんな高校生だ?

パパはすこぶる機嫌がいい。

もしかしたら、パパも出来のいい息子ができる嬉しいのかもしねない。

このアキバ男こそ、母子家庭じゃなくて最初からここに生まれてたら良かつたのにね。

あたしはなんだか胸が詰まって、箸を置いた。

アキバ男がちらりとこちらを見る。

それが何か勝ち誇った感じに見えて、あたしは立ち上がった。

「うわそりやま。」

テーブルの三人はきょとんとして立ち上がったあたしを見上げた。やがてパパが口を開いた。

「恵理花、何か言いたいことがあるなら……。」

「もう、そういうのがムカつくの〜！」

「なんでもない！今日、生理なの！」

私は言い捨てて、階段を駆け上がり自分の部屋に駆け込んだ。

第2話

またそのまま寝てしまつたらし!。

時計を見たら11時だ。

なんかいつも寝てるなあ、あたし。

9月になつたとは言え、まだまだ暑い。
汗でシャツが湿つてゐる。

あ~エアコンのタイマー切れてるし。

あたしは再びエアコンのスイッチを入れるとシャワーを浴びに階下
に下りた。

ダイニングはもうきれいに片付けられていた。
お腹減つたんだけど、もう何もなかつた。
残念。

今まででは家政婦さんがきてたけど、これからはあのおばさんがやる
んだろうな。

あたしが我儘ばかり言うから家政婦さんも随分変つた。
平均して半年周期。

おばさんはいつまでここにいられるかな?

バスルームに入つて汗でべたつくシャツを脱いだ。
レギンスもべつとり足にくつついで気持ち悪い。

裸になつて浴室に入ろうとした時、ドアが突然開いた。
湯気の中から現れたのは・・・。

田の前に、裸のアキバ男が立っていた。

「ギャー……」

あたしは大声を上げて壁にかかっていたバスロープを体に巻きつけた。

何このマンガみたいな展開？
しかも見られた。アキバ男に。

「「」「めぞ。」

アキバ男は慌ててドアを閉めて浴室に引っ込んだ。
ごめんで済むか。

少女の裸見といて！

あたしの声でパパとおばさんがバスルームに飛び込んできた。

「どうした？ 恵理花？」

「どうしたの？」

「どうしたじゃないわ。あんたの息子に見られたのどうしてくれるのよ。」

あたしはもう何に対しても怒つてると分からなくなつておばさんこ怒鳴つた。

「ど、透？ あんたまさかお風呂覗いたの？」

おばさんは顔面蒼白になつて浴室に飛び込む。

中からアキバ男の悲鳴が聞こえた。

「ちよ、ちよっと、おかあさん、入つてくるなよ。」

「あんた、女の子のお風呂覗くような子に育てた覚えありませんー。」

「「」の場合、覗かれたのはむしろオレでしょへりょと、風呂ん中まで入つてこないで！」

「いいから出てきなわー。」

「出ぬからタオルくれよ。お、落ち着いてくれって。」

アキバ男はバスローブに包まつて小柄なおばさんに引きずられるよう出てきた。

「恵理花ちゃん、「」めんね。」

おばさんに小突かれ、半ば呆れた顔でアキバ男もあたしに頭を下げた。
パパは成す術もなく呆然としている。

・・・てか、なんであんたらが謝るの？

状況見れば、偶然鉢合わせしたんだって、普通思うでしょ。

その気の遣いようと、腫れ物に触る感じがムカつくんだって何で分かんない？

ヤバ・・・。

なんか涙ってきた。

「だ、だから嫌だったのよ。い、今更、新しい家族なんて。新しいママなんて無理だし。あたし要らないよママなんて。」

あたしは搾り出すよしだせつと叫んだ。

あたしを見つめていたおばさんの目から涙が溢れた。
おばさんは皿を押さえてバスルームから出て行った。
あ、ヤバ……。

「恵理花。」

パパの声がした。

ピシャリと音がして、パパの手があたしの頬を打った。

「自分が何を言つたか分かつてるのか？」

なにこのチープな展開？

よくあるドラマみたいじやん。

笑つてやろうと思つたのに、何故か涙が溢れ出し止らなくなつた。
もうヤダ！

「パパなんか大嫌い！」

あたしはドラマでよくあるチープな台詞を吐き、階段を駆け上がつた。

ドラマって上手くできてるんだな。

だってこの状況になつたらやつぱりこの展開になつちゃうんだから。

あたしは部屋に飛び込み鍵を掛けると、ベッドにつづぶせになった。
枕が涙で湿つてくるまであたしは動かなかつた。

第3話

「ンンン。

ドアをノックする音がした。

「パパ？」

あたしはむくつと起き上がる。

パパはなんだかんだでいつも最後は心配してくれる。

「・・・じめん。パパじゃない。透ですけど。」

あたしはベッドに倒れた。
何しに来たんだか、アキバ男。

「何か用？」

あたしはつっけんじんに怒鳴る。

「大丈夫かなと思つて。湿布持つてきました。」

「あ？」

余計なお世話だし。

てか、誰のせいだと思つてんの？

「開けてもらつていいかな？渡したらすぐ戻るし。」

「・・・。」

まあ、いいか。

あたしは起き上がりつてドアの前に立つた。

鍵を開けてそつとドアを開く。

目の前にバスロードを着たままのアキバ男がいた。

「・・・?早々滝布ちやうだいよ。」

アキバ男はつっこり笑うと、いきなりバースローブを左右に開いた。

そして見るともなく目に入つた下半身・・・・・

大声を上げかけたあたしの口をアキバ男の大きな手が塞いだ。
みかけによらずすごい力だ。

「声出すなよ。あんたに話がある。」

アキバ男は笑つて言つた。

つて、笑うと「いやないでしょ！」

「ムガツ！ムガツ！」

あたしの口を押さえたままアキバ男は部屋に侵入してドアを閉めた。
そのままあたしは羽交い絞めにされる。

「騒がなこでくれるなら放すナビ。騒ぐなり、しおりへりじかね
しかないな。」

あたしは「うううう」と首を縦にブンブン振った。
締め付けてた力が緩んで、あたしは腕からすり抜けた。

バスロープを締めなおして、アキバ男はあたしを見下ろしている。

「言いたいことが一つある。」

につこり笑いながら静かな声で言った。

あ、あれ？

逆襲に来たんじゃないのかな？

「オレは風呂で眼鏡を掛けないから、あんたのことは全然見えてなかつたんだけど。完全にオレが加害者になつてるからな。これであんたもオレの裸見たつてことで、チャラにして欲しい。」

「チャラ？ も、男と女じゃ、裸の価値が違うでしょ？」

あたしは何か反撃したくてとりあえず言ってみた。

「・・・そういうと思つた。だから後は回数で帳尻合わせて欲しい。」

「

真面目な顔で言うとアキバ男はまだバスロープの胸をはだける。

「、こいつ。

これって作戦？

「もう、いいよ。あんたの裸なんて見たつてしょうがないじゃん。」

「そういうと思つた。ありがとう。」

アキバ男はまたにっこり笑う。

う・・・。

やられた。

「もひーつは何よ?」

アキバ男はじつとあたしを見た。
あれ?

なんか眼鏡ないとイケてる?

彼は意外に真面目な顔で語り始めた。

「オレは連れ子だし、はつきり言つて邪魔だろ?と思つ。自覚もあるよ。だからお荷物扱いされても仕方ないし、覚悟してる。だけど、おかあさんは本当にあんたと仲良くなりたいんだ。オレのお父さんは早くに死んだから、オレ一人っ子になっちゃったけど、いつも娘が欲しかったって言つてた。

オレのことは無視して構わない。

でも、おかあさんを傷つけないで欲しいんだ。

あんたの気持ちも分かるから、どうして無理なら仕方ないけど。」

ヲタ系アキバ男がハキハキ語るのをあたしは不思議な気持ちで黙つて聞いていた。

なんだ、こいつ今まで猫かぶつてたのか。

「無理じゃないよ。あたしもママが欲しかったし・・・。」

小さな声でポツリと語りてみた。

「なんでムカつくのが良く分かんない。みんなが氣を遣つて優しくしてくれるのがまたムカつく。

あたしのことが可愛いそつこつて思つてゐるんじやないかつて思つちやう。」

アキバ男は黙つて聞いてくれた。

優しい目だった。

「なんかそれ分かる。オレもお父さんが死んだ時そつ思つた。皆が同情してくれるのがウザかつたよ。」

そしてあたしの視線に合わせるように体をかがめる。
うわ、顔が近いんですけど。

「でも、そつ思つのは自分が自分のことかわいそつて思つてるからじやないのかな？」

へ？

あたしが？

アキバ男はこり笑つた。

「あんたはかわいいし、いいパパにも恵まれて、しかも優しくママとイケメンの兄貴ができただじやん。

これからはおかあさんもオレもあんたのこと守つてやるから。あんたは可哀相じやないし、今まで通りなにも変らなくていい。甘えてくれれば、オレ達は更に嬉しいけど。

でも、まあ、最初は慣れないよね。

気恥ずかしいのはこっちも同じだよ。

そして照れたように髪を搔きあげ、あははと笑つた。

あたしは呆然と彼を見上げていた。

そつか。

あたしのお兄ちゃんになるんだ。

今更ながら気が付いた。

アキバ男は右手を差し出した。

「実はオレも妹欲しかったんだ。お兄ちゃんって呼んでくれたら萌えるけど。」

う・・・やっぱリヲタ系?

でも、あたしはその大きな手を握り返した。
なんかが吹つけられた気がして、胸がスーっとする。
貯まつてた物が吐き出された感じ。

今まで自分でも気付かなかつた気持ちを分かつてくれた。

つまりアキバ男もずっとあたしと同じ思いして來たんだ。
考えたら、この人も同じ境遇だしね。

あたしはそれが嬉しかつた。

「お兄ちゃんは勘弁。アニキでいい?」

「・・・シンデレな感じで それもありかな。」

アキバ男はにつこり笑つた。

大きな手は温かくて、力強かつた。

「改めて、兄の透です。これからよろしく。」

第3話（後書き）

お付き合いでありがとうございました。
楽しんで頂ければ幸いです。（^_^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6395n/>

プラザーシップ

2010年11月2日13時56分発行